令和７年９月 19 日指定

松本押絵雛（まつもとおしえびな）

【製造地域】
松本市

概要

日本の押絵は、京都御所の女官たちが着物の余り布を使ったのが始まりとされ、京都に上がった武家の女性たちが製法を学んで松本へ伝えたとされている。

布地に型紙と綿を入れて包む、顔描き、組立等の製造過程は全て手作業で行われる。浮世絵風の面長な顔、平面でありながら立体的であることが特徴。

雛人形のほか、歴史上の著名な人物や歌舞伎役者等の押絵が製作されている。

歴史・沿革

松本に押絵雛が普及したのは、天保年間（1830～1843 年）、松本藩主・戸田氏の時代に藩の殖産興業の一つとして押絵雛づくりが推奨されたことが契機であるという説が有力である。

明治時代中期には生産の最盛期を迎え、押絵雛づくりが松本の主要産業となり、士族の妻女が押絵雛を製作して商人が県内各地、県外へも売り歩いた。

ひなまつりで飾られたほか、端午の節句の飾りや贈り物としても用いられた。

明治 35 年に鉄道が松本まで開通し、関東地方から立体的な人形の坐雛（すわりびな）が入手しやすくなったこと、明治 45 年の大火で、押絵雛づくりを担った士族が離散したこと、明治時代末期から大正時代には生産量を上げるために粗製濫造されたことなどの要因が重なり、押絵雛づくりは衰退。

昭和 45 年からベラミ人形店が博物館や民家に残る押絵雛を参考に生業として復活させ、親子二代で技術を伝承し、現在に至っている。

（問合せ先）　ベラミ人形店
〒390-0811　長野県松本市中央３－７－23
TEL：(0263)33-1314